

戦後63年

# 広島の子供たちによる

# 「平和の誓い」をかみしめよう

第2次世界大戦が終了して63年経った今日、残念ながら世界各地でテロや内戦を含むさまざまな形で紛争が繰り返され、多くの人の命が失われています。現在平和の祭典であるオリンピックが開催されていますが、グルジアからの分離独立を求める南オセチア自治州で独立派勢力とグルジア治安部隊が交戦し、中国においても雲南省の昆明市内で路線バスが連続爆破され、新疆ウイグル自治区で警察官などが武装グループに襲撃される事態が発生しています。

これらの紛争の背景には宗教や民族、さらには貧困の問題があるといわれ、簡単には解決できる問題ではありません。しかしどこかで負の連鎖をくい止めなくてはなりません。

私たちとしても出来る事を出来るところから始めようではありませんか。日本には世界に誇る憲法第9条があり、さらには広島・長崎における原爆の悲劇も体験しています。これらのことを自分の声としてまわりの仲間に伝え、そして多くの仲間に発信し、世界の平和に向けて少しずつでも近付ける取り組みを行おうではありませんか。

8月6日の広島原爆の日に、「平和の誓い」が小学生の子供たちによって読み上げられました。

私たちもこの言葉の重みをしっかりと受け止め、実践していきたいと思います。

## 平和への誓い

昭和20年(1945年)8月6日午前8時15分。突然のするどい閃光と爆風で、数え切れない多くの尊い命が失われました。

あの日、建物疎開や工場で働くために出かけていった子どもたちは、63年たった今も帰りません。「いってきます。」と出かけ、「ただいま。」と帰ってくる。原爆は、こんな当たり前の毎日を一瞬で奪いました。

原爆は、やっと生き残った人たちも苦しめます。放射線の影響で突然病に倒れる人。あの日のことを「思い出したくない」と心を閉ざす人。大切な家族や友人を亡くし、「わしは、生きとつてもええんじやろうか?」と苦しむ人。

でも、生き抜いてくれた人たちがいてくれたからこそ、私たちまで命が続いています。平和な街を築き上げてくれたからこそ、私たちの命があるのです。今、私たちは、生き抜いてくれた人たちに「ありがとう」と心の底から言いたいです。

忘れてはならない原爆の記憶や、核兵器に対する怒りは、年々人々の心から薄れていると思います。しかし、人の命を奪う戦争や暴力は、遠い過去のことでありません。この瞬間にも、領土の取り合い、宗教の違いなどによる争いによって、小さい子どもや大人、私たちと年齢の変わらない子どもたちの命が奪われています。

失われた命の重さを思う時、何も知らなくて平和は語れません。

事実を知る人がいなくなれば、また同じ過ちがくり返され、戦争で傷つき、命を失った人たちの願いは、かき消されてしまいます。だから、私たちは、大きくなった時、平和な世界にできるよう、ヒロシマで起きた事実学び、知り、考え、そして、そのことをたくさんの人に伝えていくことから始めます。

また、私たちは、世界の人々に、平和記念式典が行われ、深い祈りの中にある広島に来てほしいと思っています。ヒロシマのこと、戦争のことを知り、平和の大切さを肌で感じてほしいのです。そして今こそ、平和を願う子どもたちの声に耳をかたむけてほしいのです。

みなさん、見ていて下さい。私たちは、原爆や戦争の事実学びます。私たちは、次の世代の人たちに、ヒロシマの心を伝えます。そして、世界の人々に、平和のメッセージを伝えることを誓います。

平成20年(2008年)8月6日こども代表